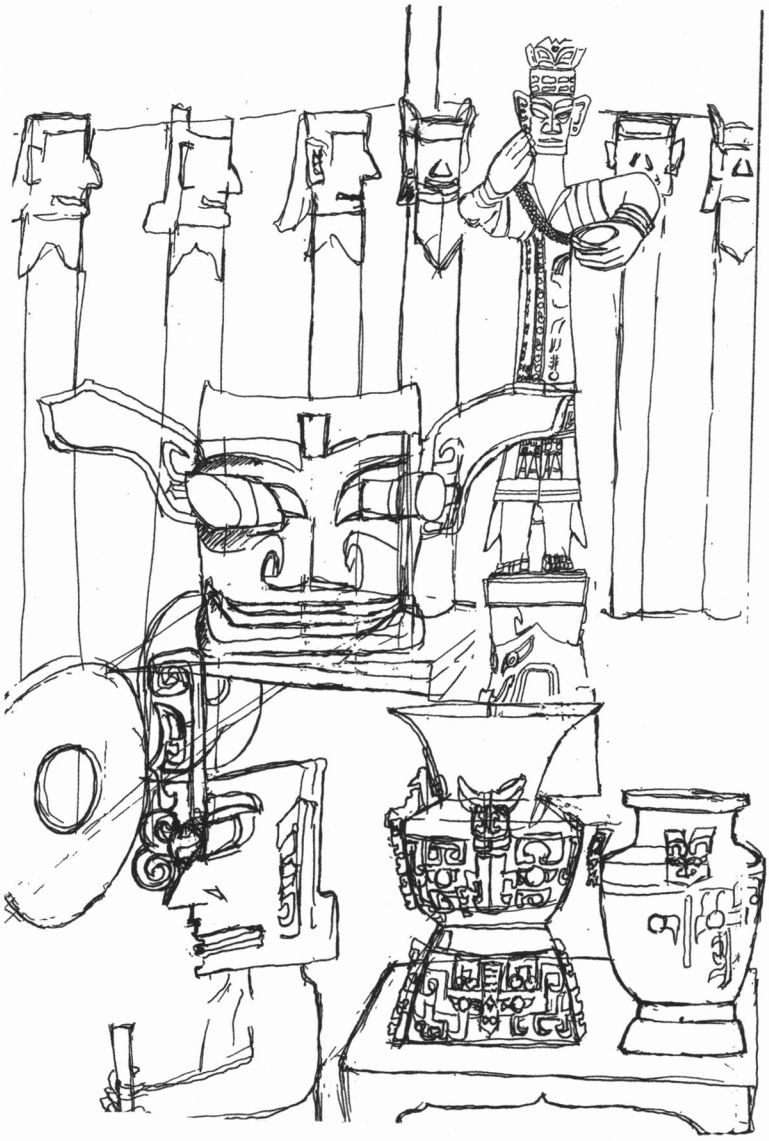
殷・周の人形鬼神と獣形鬼神

近　藤　喬　一

天地の道を絶つ
§１　虎食人卣と「かってこ」
§２　神人面紋方鼎と「大禾」
§３　夔神鼓と四瓣花目紋
§４　噩国青銅器の発見
天神と地神の合体

三星堆の鬼神たち〔第１図〕　1990年秋、山東大学での２回目の短期滞在（３ヶ月）研修の行き帰りに北京に宿泊し、折から故宮博物館で開かれていた中国文物精華展を見学した。そこで四川三星堆２号祭祠坑から出土した巨大な仮面を見た。両目が突出し巨大な耳をもつ。何でも見てとれる、何でも聞きとれるという支配者の超能力を強調するためのものではないか。人頭像をさしこんだポールトップに囲まれたホール。壁際には巨大な石璧がずらりと並べられている。正面奥に２mを越す神像（巫術王）がこちらを向き、その前に置かれた巨大な仮面。後に報告書を読んだところ、仮面の後ろ側には土が付いており、龍のような身体が土で作られていたのではないかという意見もある。巨大なトーテムポールのトップを飾る不気味な笑みを浮かべた仮面群。同じものの小振りなものを付けて踊る巫術師たち。帝としての饕餮紋を青銅彝器に表現した殷王朝の宗廟での祭祀よりも、仮面やトーテムポールのトップの人物群がより人間に近いだけに、三星堆の蜀王の祭場で行われる祭儀の方が不気味な雰囲気を漂わせている。饕餮の向こうには人間の血の気配がない。饕餮の前面に人間や動物など犠牲に捧げられたものの血が広がるだけといった感覚がある。血の海を前にして無表情に浮かぶ饕餮。それに対して三星堆の仮面群、トーテムポール群、神像はより人間に近い表情をとるだけに、仮面の裏に支配するものの血の流れを感じさせ、ある意味ではよけい不気味と言えるかも知れない。中原には人間の形、顔をとる鬼神はまれである。人形鬼神や神人面の目立つ周辺文化地域との差は何故生じるのか、それは何を意味するのか知りたいと願ってきた。今回書く論文の目的である。

朝日新聞2009年５月16日付けの台北支局の報道によると、近年急速に規模を拡大していた中国の骨董業界による競売が、このところ景気が悪くて成り立たない場合が多い。そんな時に台湾で今回行われた競売には中国の有名なものがいくつも出品されたというなかで、とりわけ珍しい青



第１図　四川三星堆
蜀王の祭儀イメージ

銅器が注目されるとしてカラー写真入りで記事が載っていた。それがなんと京都の泉屋博古館とパリのチェルヌスキー博物館にしかこれまでなかった虎食人卣と呼ばれる卣と同類のものであったのであっと驚いた。尺寸が不明なので大きさがわからないが地肌は真鍮色で、サビはあまりついていなくて、ついているサビもわりと新しいように見える。人形鬼神の耳にピアスの孔がないので泉屋の卣の模造品かなとも思う。中国本土からの情報がなにかないかと期待していたが、アンテナが低すぎるのか何もない。『南方民族考古』第１輯、1987年をたまたま見ていたら李学勤氏が「試論虎食人卣」という論文を書いておられ、終りよりの方で当時より数年前、中国本土で虎卣の偽物を見たといい、ただ虎卣の底部には亀が陰刻されており、水器の盤や酒器の卣などにはその性格を示すものとして魚紋や亀紋・龍紋などが底部内か外に鋳出される風習があることを偽造者もよく知っているのに感心したとのことが記されていた。なお偽器と思えるものは、王寿之「陝西城固出土的商代青銅器」『文博』1988年６期に形体は比較的小さく、底に亀紋を飾る虎食人卣とあるらしいが筆者は確認していない。以上は前おきで、人形鬼神と獣形鬼神の両者が共存する資料でその関係をどう理解するかが問題である。

天地の道を絶つ

§１　虎食人卣と「かってこ」〔第２図〕　泉屋博古館とパリのチェルヌスキー博物館にある。泉屋のは湖南省安化と寧郷の境の潙山から出土したものと現在はいわれている。両者は32.5cmと35cmの通高でほとんど同じ大きさであるが鋳型は異なる。虎形鬼神は前足で人形鬼神を抱きこんでいる〔第２図〕。人形鬼神は顔を左に向けて、胸におしつけられるのを防いでいる感じがする。総髪でうしろ首で切りそろえている。抱きついた虎の胸にかかる指は各４本、蹲踞した虎の後足を踏まえる裸足の足指も各４本である。虎形鬼神は大きく口を開き人形鬼神を頭からのみこもうとしているが、両者の間に緊張感はない。両者とも身体全体をさまざまな獣形紋が飾っている。

張光直氏はこの著名な虎卣をとりあげ両者の関係について最初に重要な見解を公にした。それは天地のつながりと断絶に関係する。

『国語･楚語』に「楚の昭王が大夫の観射父（かんえきほ）に問うた。大昔、天地はつながっており神と人とは雑りあっていたと聞く。それを顓頊が重黎に命じて天地を絶ったと。天地は断絶し神と人とは雑じりあうことが出来なくなったと。このことの真実はどうか。観射父が答えていうのに、少皞の衰うるや九黎が暴威を振い世の中が大いに乱れた。そこで顓頊は南正重に命じて天を司り神を帰属せしめ、火正黎に地を司らせて民を属さしめた。このことを天地の相通ずる道を絶つというのです。ただ民の中で二心なく、斉粛衷正で、智は上下に通じ、よく物の道理をわきまえ、聡明であるものには神がこれに降り天地に通じることが出来るのです。神の降った男を覡といい女を巫というと。」

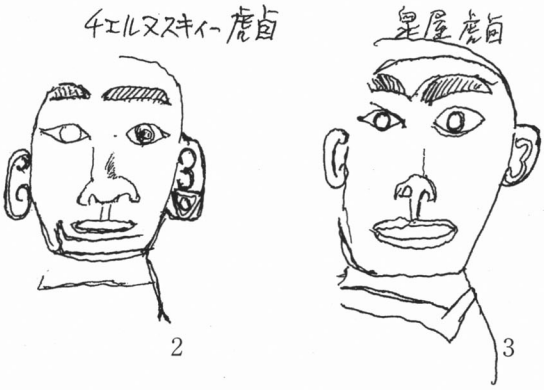
張光直氏は虎食人卣の人形鬼神をシャーマンだと比定した時、上の『国語・楚語』を引いている。彼は虎形鬼神はシャーマンの‘通霊の助手’、シャーマンが天地に意志を疏通することを助ける工具としての動物だという見解を示した。

上海博物館の馬承源氏は人物の手足の指が各４本であることを注意しながらその意味には立ち入らず、虎卣のモチーフは神虎が邪鬼を食べる避邪の思想を表すことにあるとした。陳佩芬氏は1998年上海博物館で開催された「古代中国の礼儀と盛筵」展に特別展示されたパリのチェルヌスキー博物館所蔵の虎卣について‘虎が喰おうとしているものは人に似て人に非ず怪人’と表現する。人形は‘自我’を表現していて具像的な真人でなく人形の異物である。虎卣のテーマは商人（しょうひと）がいかに鬼神崇拝の体現に熱中しているかを示しているという。

王震中氏によれば山東大学の劉敦愿先生は虎は虎方の族徽、虎方のトーテム崇拝を示す。そしてⓐ虎は虎方の祖先あるいは保護神。人頭あるいは人形は彼によって征服された部落を示す。ⓑ人形を虎口の下に置くことは、人牲を以って虎神に奉献することを示すものか。ⓒ銅器紋様中のこの種の人形は、彼等が虎神の子孫であることを示すものか。ⓓ虎が人に哺乳しているか、両者の交媾か。

李学勤氏はアメリカコロンビア大学のフライス教授の‘第二の我’（alter ego）の考えを受けいれ、虎食人あるいは龍食人というのは人と神聖な虎、龍の合一（人神合一説）を意味するという。

劉敦愿先生も虎と人形鬼神の交媾を説いたが、李氏も場合によっては両者の交媾もあり得るという。この点は泉屋博古館の広川守氏らと九州国立博物館のＸ線ＣＴスキャナによる撮影の結果は、少なくとも銅器の断面には交媾しているような形には作られていないということを明らかにした。



第２図　虎食人卣
1･3 泉屋博古館　2 チェルヌスキー博物館

王震中氏はこれまでの見解を検討し張光直氏の説については、巫師の人形と組み合さる動物紋様としては獸面紋（饕餮紋）、夔龍紋とその他の動物紋様が主であって、人虎の組合せが少ないのが本来当然だ。ところが実際は逆で人形とその他の獸面紋が組み合さっている例はほとんどない。張先生の解釈の受け入れ難いところはここにあると王震中氏はいわれる。

劉敦愿先生の場合、虎の解釈に片よっており、そのままだと虎卣は方国のトーテムだという説も受け入れ難い。

王震中氏は虎卣が表明しているのは虎方の族徽であるとの見解を展開している。武丁時期の甲骨文中、虎方は商王朝に服属した資料があり、時には征伐や追撃の対象になっている。昭王の時の中方鼎の銘文に（「隹王令南宮、伐反虎方之年。王令中先、省南或貫行、𢦏王应、才夔□□山、中乎歸生鳳𢦏王、𢦏𢦏寶彝。」）〔唯れ、王、南宮に命じ、反せる虎方を伐たしめた年、王、中に命じて先んぜしめ、南国を省して貫行し、王の应を𢦏めたり。夔□□山に在り。中、生鳳を王より歸らしめられ、寶彝に𢦏せり。〕とある

のなどはよい例とし得よう。〔『金文通釈』五三、71-e〕

虎卣は服していた時の虎方の首長へ、殷王朝の工房に命じて虎方の出自にまつわる神話、あるいは伝説の中で一番大切にしているものを具像化して殷王が与えたのだと考えている。いいかえれば淮水流域に勢力を誇っていた商代虎方を手なづけるために、殷王朝が部族誕生神話を暗示する虎卣を作り虎方に与えたものだと。虎は虎方国族の族神で、人はその部族の来源は虎であることを意味していると。ただいくつかの疑問が王氏の説に対しても考えられる。例えば虎方だけなぜ始祖伝説が銅器の形をとって表現されているのか。

なお林巳奈夫氏も1986年『泉屋博古館紀要』第三巻に「神なる虎豹と人間形鬼神」というタイトルで漢から殷までの資料を扱い、泉屋の虎卣も含めて論じているが、出自、文化の帰属先、年代のはっきりしない民族資料を使うことに否定的であった氏はシャーマンとそれに関連することに触れていないので奥歯にもののはさまったような論文になっている。安徽阜南の虎食人尊もあつかっているが、本論文では殷後期に編年しており、後の論文で西周Ⅲ期とする編年とはまだ異なる。平成６年（1994）の同じ『泉屋博古館紀要』第十巻、「華中青銅器若干種と羽渦紋の伝統」で西周Ⅲ期（林氏編年による）と時期をさげている。

ここで林氏が虎食人尊を西周Ⅲ期（西周晩期）としたことより派生するのが、王震中氏は虎食人尊を殷代のものと考えておられ、卣とともに殷王朝から下賜されたという見解に立っていると思われるが、時期が異なると尊は下賜されたものではなく、虎方の自作品となる場合もあるのではないかという点である。この尊の最大の注目点は人形鬼神が長い舌を出していることである。舌をだす鎮墓獣や陶俑の春秋～东漢にかけて長江中下流域の楚文化に存在することは周知のことであるが、それと同じ意味かどうかはひとまず置くとしても考慮するべきことと思う。

内田純子氏は泉屋の虎卣について「その特異な器形は殷墟系青銅器の中で見いだすことができず、湖南出土の伝承をもつことから、華中型青銅器としてとりあげるが、厳密な意味で華中型としてよいかどうか疑問が残る。高精細画像による渦紋の観察でも非常に均整がとれた渦で〔華中型特有の〕不均一な渦線は確認できなかった。…」という。内田氏のいう特異な器形というのをもう少し分解すると、蹲踞する虎形と人形鬼神の組合せではどうかということになる。殷から周初にかけて、殷王朝の周辺では跪坐とか蹲踞の姿勢はそれほど見かけないことではなかったかと思える。中原で蹲踞の姿勢をとる虎形は河南安陽侯家荘M1001号大墓より石製のものの出土が知られており、河南省鹿邑太清宮の長子口墓から小さいが同じような姿勢の石製虎が出土している。また侯家荘M1004号大墓からは大理石製跪坐人物像が出土している。虎食人卣の人形や虎形鬼神の姿勢もそれらのあり様にかさねると理解しやすい。伝承を重視して華中型としいてする必要はなく、殷王朝末期、王朝内工房作品と判断して良いと考える。

王震中氏の見解は他地域で発見された中原タイプの青銅器の帰属をきめる時に重要な視点を提供すると思われる。後に検討する。

ただ私は王氏が張光直氏の人形鬼神がシャーマンで、断絶した天地に意志を疎通させる、あるいは生者の世界と死者の世界に橋わたしをする、その介助を虎形鬼神が果すという考えを否定されるのに疑問を感じている。たしかに張氏は青銅器につけられた動物紋様がシャーマンの力の佑助の役を果すとは主張されたが、何故そういえるのかは実際のものに即して論じているとはいい難い。筆者は例えば泉屋の虎卣を見るとき、虎形と人形鬼神のあり方は、日本の子供達の幼い頃の遊びにどこかつながるところがあると感じる。虎卣をもう少しものに即して見てみよう。すると

a　手足の指が５本指でないこと

b　人形鬼神が蹲踞の姿勢をとり虎形鬼神の後足の甲を踏まえていること。場合によっては背負われている場合もある。

aについては、例えばニオラッツェの『シベリア諸民族のシャーマン教』の中で図示されたシャーマンの衣装の中に６本指の手袋があげられている。これはシャーマンの特殊な能力を理解させるために、あるいは理解するために身体的異常の持ち主＝異能の持ち主との理解あるいは納得のためのものであろう。新石器時代、青海省柳湾遺跡から出土した彩陶に貼りつけと描写で表現された女性像（第４図１）は裸体で右手６本指、左手５本指である。なお５本指ではあるが手の甲に饕餮紋と巻雲紋が彫りこまれ銅手形器と名をつけられた手の形をした銅器が河南安陽殷墟花園庄東地のM54号墓から出土している。M54号墓（亞長墓）は報告者によれば殷墟二期偏晩の段階で墓の規模は、年代的に少し先行する婦好墓の次ぐらいに安陽で調査された墓葬中位置する。また銅鉞が７件ほど出土していてこの期の殷軍の主力メンバーの１人と思える。青銅器の多くは彝器も楽器も亞長の銘をもっている。手形器（第４図４）は右手片方だけが、右ふくらはぎ（すね？）の横から出土した。饕餮紋が手の甲につけられており、５本指でもシャーマンの衣裳的役割を果すものであったかも知れない。

いずれにしても、虎卣で虎にむかい虎の後足の甲の上に蹲踞する人形鬼神はシャーマンと解される。安徽阜南や四川三星堆から出土している龍虎尊の腹部を飾る三組の食人虎は肩にそって表現された双身一頭の虎口の真下に立ち、舌をだす人形鬼神も虎形鬼神を背後に従えた姿とも理解できる。

林巳奈夫氏は阜南の「虎食人尊」を西周Ⅲ期まで下ると判断されているが、ここではそれを横に置いて、指の数の問題に帰ると、責任のある記述はどこにもない。阜南も三星堆も手の指各５本、足の指各４本に見える。

なお陝西省宝鶏茹家荘１号墓に附属する１号車馬坑の１号車と３号車馬坑の１・２号車の轅の先端にさしこむ車飾りがある。軏飾という。軏飾の正面は一大虎頭で頭上には冠をかぶる。冠には雲気紋が表現されている。虎頭の背後には小人が一人うずくまっている。顔は幅広く頭は平坦で大耳、口は大きく鼻もぶあつい。身には短い褲をはき幅広のバンドで腰をしめる。文身をいれ

ており長髪を後へ垂らしている。背中には後をふりむきあった鹿が描かれている。これを轅の先端にさしこむ。足は皮のバックスキン風の靴をはいているようだ。小人の両手は４本指のように見える。蹲踞の姿勢で虎形鬼神の背中、首の後近くに両手で冠をしっかりもってこれから走りだそうとする車馬の軏として先頭をきる位置にあるといえる。雲気紋だということに意味を求めるならこれらの車馬は空中を飛んで天上界へも行けるかもわからない。小人達がシャーマンを写したものである可能性は認められよう。

ｂの虎形と人形鬼神のあり方は日本の子供達の幼い頃の遊びにどこか結びつくものがあると考える。蹲踞した虎形鬼神は両足の甲の上に向きあって抱きつく人形鬼神の足をそれぞれ載せ、両手を各々ひいて自己の両足を前後左右に自在に進退させることができ、人形鬼神は労せずして目的地へと到る。虎形鬼神の身体能力を借りることが出来る。古くからある大人が両足の甲の上に幼い我が子の足をそれぞれ片足ずつ載せ自在に進退することにより、子供の心に、立つこと、動くことの楽しみを教え、近々とむきあった親のぬくもりの中に信頼感を生じさせ、愛情に包まれていることを実感させる。岐阜県の飛騨地方に残るこの「かってこ」と呼ばれる遊びは「かってこ、かってこ、なんまんだ、ようそのぼうさんしりきった」という歌とともに雪道が硬く氷りついた上を歌いながら元気に遊ぶ子供達に幼い頃の一時をおもいおこさせる。ところによっては‘あひる歩き’とか‘ペンギンさん遊び’とも呼ばれる。虎食人卣の虎形と人形鬼神の姿態は私にこの日本の子供達の古い遊びを、ひいては自分の幼い頃の体験をおもいださせる。「かってこ」と同じようにこの姿態から読みとれることは、虎形鬼神がシャーマンの指示に従って自身の力を存分に発揮できる態勢にあることを示し、虎卣の姿は「虎食人」「乳虎」「交媾」といった類のものを考えるよりは、シャーマンとそれに力を貸す虎形鬼神と考える方が自然であろう。それが王震中氏のいわれる虎方の始祖伝説を表現したものであったとしても、その始まりの時点で祖神はシャーマンとしても力をもっていたということであるから。虎形鬼神の身体能力とは何か？虎自身の能力のほかに身にまとった龍形鬼神をはじめとする獣形鬼神のもつどの力も発揮できることの表明と思える。

陝西宝鶏茹家荘Ｍ１号墓の附属車馬坑から出土した人形鬼神が、轅の先端にはめこむ軏飾では足の甲の上ではなく、虎形鬼神の頭の冠の上にだきつく、あるいは背負われている形をとる。茹家荘Ｍ１号墓乙室墓からは、高さ17.9cmと小さな銅製人形鬼神〔第４図３－ａ〕（男相）が出土、長い琮を右肩の上で両手で支えている。柄をさしこむ細工がしてある。棺槨の間で頭の方に向ってあった。乙室墓は出土した銅器の銘から強白(伯)𣪘の墓と思える。銅人は墓主の生前の姿か、墓主を弔い、死者の道を案内するために棺槨の間に納められたものか、いずれにしろ琮をとり扱う姿は四川三星堆の２号祭祀坑から出土した巨大な巫術王の姿とオーバーラップするものがある。

茹家荘Ｍ２号墓でも銅人第４図３－ｂ（女相）高さ11.6cm、木柄にさしこんだものと思える。頭に山字形の髪飾りをつける。左右の手に玉琮をもちダンスをしている。銅器の銘文から先の強伯

焰の妻、周の有力貴族、井（刑）伯の娘、井姫の墓葬と考えられる。両者の墓は西周中期、穆王の時期に比定される。いずれにしろ泉屋の虎卣については張光直氏の説を筆者は支持したい。

これらの青銅器が作られた歴史的背景はどうか。山東から江蘇にかけての沿海地帯には当時人方（夷方）と呼ばれる人々が群居し、また河南西南部に源を発し東流して洪沢湖から黄海に流れこむ淮水流域に勢力を築いていた虎方などがおりそれらの夷族との戦いは、背後の安定を願う殷にとっては避けられない道であったと思われる。

武丁の時の卜文に虎方をして方夷を追わしめんかとか虎方が殷に貢納したと思えるものがある。一方、なかには望乗と輿をして虎方を追撃せしめようか虎方を征伐せんかといった類のものがあり、殷と虎方の関係はある期間は虎方の殷への服属といった状況にあったと思えば、時には殷に対して反乱を起こすという態度をとる時もあったことが伺える。殷の滅亡が、紂王の酒池肉林に代表されるような放恣で残虐な、政治を捨てた生活にあったなどと伝えられたこともあるが、実際に殷が滅びたのは帝乙・帝辛時の人方征伐に国力を傾けるぐらいのエネルギーを消耗し、そこを西方から起って淮水上流、漢水周辺の夷族をも糾合した周族に、大義名分を与え牧野の戦いで敗れた。

周公が武王を助けて克殷の大事を遂げて２年、周の武王は死没し成王の後見として周公が王の実権を握り政治を代行した。殷王朝と時に服従し、時に抗争した虎方の族人は、周王朝の支配の時代になると対立する姿勢がより強くなっていったと思われる。武王による帝辛の討滅は商王朝範図内の全勢力の周に対する屈服を意味するものではなかった。彼等夷族と総称される人々は商王朝支配下でもそうであったように全面的な服従とは遠いものであったと思われる。そのため周室は帝辛を滅したあとたびたび東方にむけて兵を発動せざるを得なかった。そのため殷の紂王を討ったあと洛陽に成周の都を作り、東方支配の根拠地とした。また西安に作られた武王の時代の周の首都鎬京で、降伏した殷の紂王の長男武庚（禄父）を宋に置くことを決定し、宋の桑林を奉ぜせしめた。また武王の息子、周公の兄弟にあたる管叔、蔡叔を念のため三監として武庚の監視役とした。しかし東方沃野の直接支配への魅力は強く、武王の死と成王の即位、王の実質の権限は周公に握られたことを知った彼等は武庚と手を結んで東方地域、各地に生息している殷遺や殷と友好関係にあった各地の夷族とも手を結び、成王（周公旦）の周に対して大叛乱を起した。建国まなしの周王朝にとっては強い衝撃を与えるものであった。三監の乱である。自ら先頭にたって兄弟や殷遺との戦いに臨んだ周公は、３年でこの乱を鎮定する。武庚を誅殺し、管叔を殺し、蔡叔を放逐した。また夷族のうち山東半島や周辺を根拠地とする有力な東夷の強国、奄、薄姑、豊、徐の四大国の解体に手をつけ奄には自身の息子魯公伯禽、薄姑には周の克殷に大功をあげた太公望呂尚を斉に封じた。益都蘇阜屯墓はこれまで薄姑の墓葬群だといわれてきたが、漢書地理志に「至周成王時、薄姑氏当四国共作乱成王滅之、以封師尚父」とあり、また黄川田修氏が主張されるように呂尚を封じた斉国の墓葬と考えた方がよいかも知れない。特にＭ１号墓は盗掘され

ているが４条の墓道をもち、亞字形の槨室と南墓道と墓室とつながる甬道の部分を含め墓葬全体で殉死者48人を数え、北側墓道の側縁に人形鬼神を全面に表した青銅鉞を伴うなど薄姑の墓とするには疑問が残るところも多い。周との関係、東夷に対する戦略的位置などを考えた時、初封された斉と考えることの方が納得できるのではなかろうか。なお§３でのべる四瓣花目紋が筆者が考えるように殷の軍神と関係するものであるなら、亞醜銘銅器のうち方觚・方瓿にこのマークをもつものがあることは、殷之彝の考えた亞醜銘銅器は薄姑を示すという考えとは矛盾する。

殷と東夷の方国との関係は服従と支配か、屈伏と反乱のくり返しであったといえる。殷は上帝や祖先神の祭りのためには、主として西北方にいた遊牧系の民、羌族を人身犠牲として捧げた。殷墟での犠牲者はざっと15,000人といわれる。一方沿海地帯の人方（夷方）や虎方の方国の民は生かして貢納の義務を課すことを目的としたと思える。農業生産力のちがいがこういった状況をもたらせたのではないか。沿海地帯の夷人との戦いを有利にしようと企んだ帝乙・帝辛の政策は夷族の強力な反撥により国の滅亡という結果を導いたといえる。このような背景の前に虎卣を置くとその歴史的意味あいがよく理解できよう。

§２　神人面紋方鼎と「大禾」〔第３図－１〕

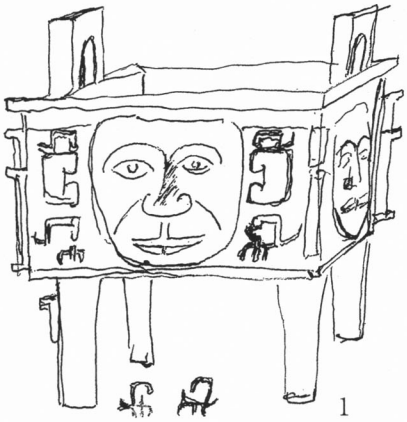
鬼神とは『春秋左氏伝』宣公三年（B.C.606）の経には陸渾戎を伐つとあり、その伝に楚の荘王は伏牛山の北に盤居する陸渾の戎を伐った余勢をかりて、成周との国境沿いに兵を展開し軍事演習を行い周を威嚇した。周の定王は大夫の王孫満を遣わし楚王をねぎらった。その時「周には九鼎があると聞くが、その大小、重量はいかほどのものか」という。暗に楚に九鼎を譲っては如何かと恫喝した。満が答えて言うのに「天下を支配するのは鼎をもっているかどうかではなくて徳の有無によるのです。昔、夏の禹王さまの時、遠方の国々よりその地の様々の物について絵を描いてきた。九州の牧に命じて金（銅）を貢上させ、九鼎にそれを鋳造させられた。その土地の精霊＝物＝鬼神を鋳こませた。おかげで民は山川薮沢に入って魑魅魍魎（ちみもうりょう）にあっても承知していたので困難な目にあうこともなくなった。九鼎とは民のために作られたもので、天下を支配する力などというものとは無関係です」といった話が載せられている。

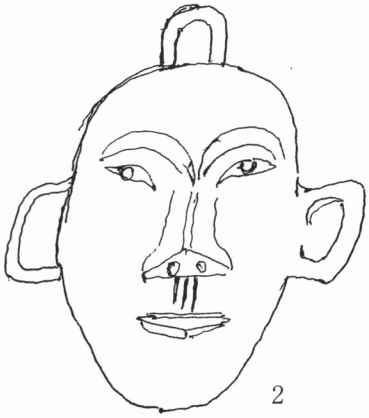
神人面紋方鼎〔第３図－１〕は湖南省長沙市の廃銅倉庫中から選んで湖南省博物館が1959年に購入した。施勁松によれば湖南省寧郷黄材寨子山出土という。方鼎の各面に全面顔かと思うような人面が鋳出されている。Ｃ字形の耳の上に几字形虺龍紋をそえる。（林巳奈夫氏は几字形の羽冠という。）施勁松は角という。両耳の下に４本の爪をもった小さい足を向いあう形で表現している。胴部はない。林は頭足紋と呼称している。（３才～４才ぐらいの幼児が書く絵に似た特徴をもっている。）方鼎内側の側面、口縁部に近いところに「大禾」の銘を陰字で鋳出する。

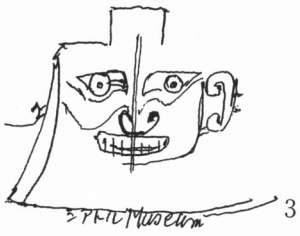
方鼎は林巳奈夫の編年では殷後期Ⅲ期とされている。河南省鄭州張寨南街のほぼ方形の平面形からはじまった方鼎の口長と口幅の比をとると先に発表した「鄭州商代銅器窖蔵考」（山口大学

『アジアの歴史と文化』第11輯、2007年）の第１表のようになる。１～８までは鄭州城外側周縁から発見された張寨南街１・２号、向陽回族２号、８号、南順城街１－４号がしめる。殷の中期Ⅰ期のものとみてよく鼎長と幅の比は、１～(0.94）とほぼ方形に近い。10と11は江西新干墓出土の方鼎のデータ。12－18は12－13が婦好墓（殷墟二期）、14･15は侯家荘M1004号墓（殷墟三期）出土の牛鼎と鹿鼎、16はM260号墓出土ときめられた司母戊鼎、林巳奈夫の編年ではいずれも殷後期Ⅱ期となっている。大禾銘鼎は長辺が29.8、短辺が23.7cmあり、長辺を１とした時に短辺はその0.795を呈する。機械的に数値順に並べると婦好墓以下の殷墟出土方鼎の比が１：0.70～１：0.75の間を示すのに対して、どちらかというと新干方鼎グループに近い値を示している。

ところで虎食人卣について考えた時、先ほどの王震中氏の見解が認められるとなると、殷王朝が方国の長に与えた青銅器が存在することを認めることになり、これまで中国の研究者を含む多くの人々が、華中・華南から出土する殷周の青銅器について、殷周世界の変動により南の方へ中原の人々によってもちこまれたと考えるか、華中・華南の人々によって製作されたか、いずれかの二者択一の道しかなかったところへ新しい考え方をもちこむことになる。華中青銅器の代表的な研究者、向桃初氏は『文物』2006－８の論文「炭河里城址的発掘与寧郷銅器群再研究」の中で湖南寧郷出土の銅器群を五類にわけておられる。いま要約すると、







第３図　神人面紋方鼎と人面
1 湖南寧郷･安化の境
2 侯家庄M1400号大墓
3 プロイセン文化財博物館

A　殷墟商文化風格のもの。銘文のあるものはいずれもこれに属する。（大禾銘方鼎が相当すると思われる＝筆者）

B　二里崗期銅器の風格に近いもの。華容、岳陽の大口尊、岳陽魴魚山、平江涪口の折肩罍（林巳奈夫氏のいう截頭尊）、新邵陳家坊出土瓿と黄材発見の特大型瓿。〔華中型　江漢平原東部地区製作〕

C　動物形尊、卣など。寧郷月山鋪出土四羊方尊、伝寧郷潟山の泉屋博古館とパリのチェルヌスキー博物館蔵の虎卣、長沙跳馬澗出土（大英博蔵）両羊尊、湘潭九華船形山出土豕尊、醴陵獅形山出土象尊、衡陽包家台子出土牛尊（觥を称する）など。（しばらくどこの鋳造か疑を

存すという。)

D　大鐃　湘江流域と思う。その源頭は鄂東南贛西北、湘江流域の大鐃は多くは晩出

E　越式銅器

A、Eは一致、B、C、Dは意見がわかれる。

BについてRobert W. Bagleyは南方青銅器、林巳奈夫は地方型青銅器、内田純子は華中型（鋳造地は両湖地区）と呼ぶが、いずれも南方地区での鋳造という見解、向氏も同意している。〔鋳造地は湖北江漢平原東部地区〕。分布範囲は北は湖北棗陽、安陸雷公鎮、西北は陝西城固、東は安徽阜南、六安、江蘇江寧、南は江西南昌、湖南新邵、西は湖北江陵、沙市、重慶巫山、四川広漢。

江漢平原東部地区は二里崗期商文化が直接コントロールしていた地域で中原地区と同じ早商銅器が大量に作られていた。強大な方国であった可能性があるという。(戦国時代の曽侯乙墓などをふまえてか？)向桃初氏は方国の名はあげていない。(その一つが第４章でとりあげる湖北随州噩(鄂）侯国である)

では神人面紋方鼎は銘があるからといって無条件に中原のものがもちこまれたと決定し難いとなると何がいえるか少し考えてみたい。

陳夢家によれば禾は米あるいは穀物を意味する。甲骨文による収穫を祈る卜辞によれば、大米の年(みのり)を祈る資料はあるが、大禾といういい方で年を祈った例はない。島邦男の『殷墟卜辞研究』によれば「禾」は地名としてでてくる。「在☐」とか「田(かりす)于☐」とか「☐受年(みのり)」といった形で☐を地名と判断した場合に。すると「大禾」銘を烹熟器といわれる物を煮炊きする鼎に入れるということは、当該地域の米の収穫の豊かならんことを願い、殷人が「大いなるかな禾よ」と銘した。禾が侯の名として卜辞にでてくる場合もある。

島氏の卜辞地名関連略図を参照すると、禾という場所は殷都のま南、黄河をこえてすぐの処、淮水とはかなり遠く隔たる。殷都と淮水の頂度まん中あたりに図では書かれている。黄河との関係でみれば、禾の地は鄭州の近く、殷都は安陽と考えられる。鄭州→新鄭→（郾城）→駐馬店→信陽→孝感→武漢のルートは現在も中国の南北通交の大動脈であることにかわりはない。殷の範図は南は淮水までとしているのなどに端的にあらわれているように、島氏の研究資料は大規模発掘が行われる前のことなので、湖北や湖南の状況はまだ十分明らかでなかったことを念頭におく必要はある。ただ最近の研究成果によれば殷墟期には華南の南深く進出していた殷の勢力は、殷末になると淮水が南夷との境になるという。「禾侯」という形で卜辞に出てくるのは甲骨文断代の第一期に島氏の段階では限られている。一方、大米の年を祈る卜文は武乙、文武丁の時代に限られている。

卜辞の研究によると、甲骨文の一～五期の間、殷と友好関係にあった方国、殷と敵対関係にあった方国とがわけて並べられている。その中に人面を族徽としていると言えるものはない。林巳奈夫は甲骨文と殷周青銅器の紋様を対比させて族徽とし得るもの20例を選びだしたが、その中にも

ない。島の研究には殷の封建についても書かれている。その中に禾侯というのが一期だけに存在する。なお一期と四期には董作賓は蒙侯虎、胡厚宣は侯虎、陳夢家は𠂤侯虎と読んだ侯（氏族名）がいる。なお禾侯の封地は𠂤侯とともに周に近いとある。伝承であって歴史的事実とするのには問題があるという人もいるかも知れないが、周の武王が牧野の会戦に先立って西南部の部族に決起をうながした。それらの方国には、庸、蜀、羌、髳、微、盧、彭、濮など八国がある。楊寛によると、庸は湖北竹渓の東南、蜀の北境は漢中に達する。羌の主要は甘粛南部、盧は湖北襄樊の西南、濮は現在の四川と湖北の間、彭は湖北房県西南、微（眉）は陝西眉県東、髳は山西南辺という。後３者は推測の域を出ないとされている。この場合、範囲は淮水の南、湖北の西半分、北から淮水と長江の間の1/3ぐらいをカバーしている。新石器時代には石家河文化の影響の一番つよかったところと見える。以上、島氏や陳夢家氏の卜辞の解釈や楊寛氏の牧野戦前、決起を周の武王に呼びかけられた部族の範囲をおおまかに考慮すると、「大禾」と呼びかけられた地域は現在の湖北省なかばより以東を含む地域がおおまかに考えられる。それに近年発表された石家河文化の分布図を重ねると、湖北襄樊市の南、漢水の東側、石家河を中心として東は鄂州、北は淅川、西北は陝西との境、竹渓、下って宜昌、南は華陽といった範囲の広がりのうち、漢水の流域、淮水の上流地域が考慮される。

銘文や器形の上からは以上のように考えたが、人面そのものが鬼神として登場したことについては触れずにきた。そこで殷周文化に先行する中国新石器時代の文化中、土偶・石偶の類で人面に関係するものを検討した。甲元眞之、今井佳子の両氏が中国新石器時代の土偶・石偶の集成図を作成されている。それに林巳奈夫氏の玉製品の研究資料を参考にした。①耳にピアス孔の有無、②むきだした歯列の両口端に上下に牙の有無の二つを目安にして調べた。

土偶・石偶の資料では、

①ピアス孔の有るもの。１陝西西安半坡遺跡、２陝西宝鶏北首嶺遺跡、３陝西安康柳家河遺跡、４陝西南鄭龍崗寺遺跡。５甘粛秦丘大地湾遺跡、６甘粛天水紫家坪遺跡、７甘粛秦安寺咀坪遺跡、８甘粛広河半山遺跡、９青海楽都柳湾遺跡の９遺跡で陝西、甘粛、青海の仰韶文化（半坡～廟底溝類型）のものに限定されている。

②牙のあるものは骨製品であるが、陝西西郷何家湾遺跡（仰韶文化半坡～廟底溝類型）の例だけである。

林巳奈夫氏の研究された中国新石器時代の玉器を材とした鬼神像を上のデータに加えると、

前3000年～前2000年

①良渚文化　崧沢文化から発展した稲作を主とする新石器時代文化。太湖周辺を中心に北は海安辺、南は杭州周辺。前3100年～前2200年位。余杭県良渚。反山墓地は良渚２期。呉県張陵山の玉琮に刻まれた鬼神は、同心円の双眼と眉、口は上唇の中央が凸出した形で両端に上下牙がある。ドッキングした神面と獣面の場合は獣面のみに両口縁端に上下に牙がある。

②含山凌家灘（前2500年±500年）玉製の人形、ピアス孔あり。

③大汶口、山東龍山、河南龍山文化（B.C.4300～B.C.2500）大汶口中期～晩期文化と龍山文化、及びその地域の良渚文化と平行している。

山東龍山文化の玉斧の刻紋、ウラ・オモテに鬼神、白目の耳にピアス孔のある鬼神が牙を上下にむく。

④石家河文化　玉器のウラ･オモテに鬼神、オモテの鬼神はピアス孔、口両端に牙を上下にむく。

前2000年～前1500年

1　二里頭文化

2　二里崗文化

3　殷墟文化　耳にピアス孔のあるものなし。上下牙をむくのは鉞のモティーフにあるが、人物ではない。

新石器時代の土偶・石偶・玉製の人形または刻紋で、ピアス孔のあるものは中国の北西方面の仰韶文化が一番古く、その影響を受けて始まったのか中国東南の沿海地帯の玉器文化の地域で、ピアス孔、口縁端の牙をもつものがあらわれる。各地の文化要素を受けいれたかに思える中原の殷・周文化では人形鬼神はピアス孔をもたず、口縁端に牙もない。そうした点からは、問題にしている「大禾」銘神面紋方鼎は中原の製作といえる。

ところで新石器時代の土偶、石偶で注目すべきものは紅山文化の時期の遼寧省牛河梁遺跡で、山中の洞窟の奥壁に近いところに等身大の女神塑像（中には３倍大のもあるとのこと）が貼りつけてあり、附近には手足の部分が落ちていた。目はトルコ石をはめこんであるのか青味がかっているとあった。また中国では珍しい妊娠女性像もみられる。

青海柳湾の馬家窯文化馬廠類型の彩陶壺に人頭、人面、その他を貼りつけて両乳、ヘソ、性器を露出した人物（第４図－１）が塑造されているのも先の例と同じく豊穣儀礼の存在を示しているものといえよう。甲元氏は①陝西以西と②河北以東の東北は両性具有を認められるというが、筆者は実態を把握していない。ただ殷墟婦好墓から発掘された玉製品の表裏に裸体の男女一対を示すもの（第４図－２）は両性具有の意図を示すものであり、厳志斌は特徴のある髪型から金文☿と対比して、それが☿族の族徽であるとする。

春秋初頭の遼寧省南山根遺跡出土の遼寧式銅剣の柄には、表裏に裸体の男女を表し両性具有を示している。婦好は西北方の羌族や土方・夷方らと戦ったことが卜辞の資料から知られる。玉器は戦利品か、贈られたものかは別にして、河北以東のシベリアに連なる中国東北地方では少なくとも新石器時代から春秋初頭までは両性具有のシャーマンが大きな役割を果たしていたことを推定させる。この地の神信仰の重要なあり方を示しているといえよう。

M. エリアーデによれば、シベリアのシャーマンは両性具有の人物を大事にし、それはシャー

マンとしての重要なファクター、特性の一つに数えている。シャーマンは女装に必要な道具を揃え、身ぶり、手ぶりも女性と同化しようとする。男女は両極、天と地に対応し、両者を一身の身に兼ねそなえることは天地の統合につながるとの意識があるという。婦好墓出土の玉器は𠀤族のシャーマンの姿でもあった。

では青銅器文化の時代、いいかえれば殷や西周時代の鬼神の類で、新石器時代のものとつながるものがあるだろうかと見まわした時、華中・華南の新石器時代に根をもつ鬼神が殷周時代の鬼神に影響した例としては、良渚文化の浙江省反山M12号墓出土の玉琮に彫られた神人獣面紋の鬼神の例があるが、それは少し後で検討するとして、ここでは神人面紋方鼎の鬼神に匹敵する同時代資料との対比を試みてみたい。当時の殷の支配下内で方鼎の鬼神（顔タテ14.70cm）に匹敵する例は、侯家荘M1400号大墓東墓道口から数件の彝器と一緒に発見された青銅仮面（顔タテ24.0cm）〔第３図－２〕しかない。しいて他の例をあげるならベルリン・プロイセン文化財博物館の銅鉞に

第４図　シャーマン

1 青海柳湾　2 婦好墓　3 殳伯墓　4 殷墟M54

飾られた人面〔第３図－３〕をあげられようか。しかしこれは歯を露出しているし、鉞という武器を飾る鬼神であって方鼎とは距離がある。施勁松は『考古与文物』1999－2で、山東青州穌阜屯出土の商代末期の車軏と上海博物館のもつ安陽出土商代晩期の弓形器の上にある人面紋がよく似ているという。筆者は確認していない。

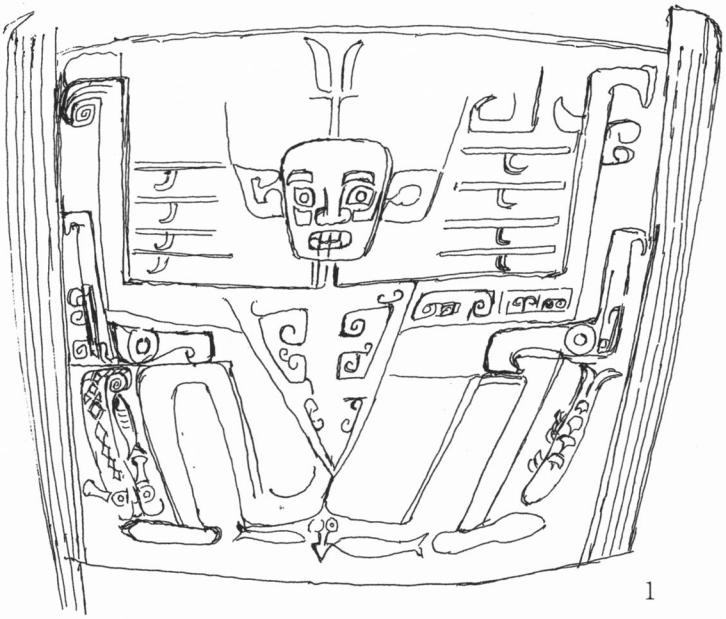
M1400号大墓出土の人面は鼻孔面を平らにすり切ったように見える。目は一線で目頭・目尻は鋭くとがる。後の凹みの部分に有機質が検出されて木に取りつけられていたのではないかと考えられている。しかもよく見ると不気味なことは、この像は両目、両耳、両鼻孔に先に丸味のある中空の青銅製の細めの棒状のものが打ちこまれており、三星堆の巨大仮面の目が突出し耳が誇大化されているのとは逆に、きれいに鋳造された仮面をわざわざ、目をみえなくし、耳を聞こえなくし、鼻をにおえなくするという所業を何故か示している。仮面の人物が、中原いがいの夷族を表現しているとすると、まるで刑にかけたか、呪いをかけられたかの姿に見える。何故こういうものが必要であったのか。侯家荘M1400号大墓では階段式の墓道にずらりと夷族の頭骨〔頭骨を切りはなしてあるのは（成人）男性に限られている〕を並べて王の方にむかわせている。死後も王にさからわず、王に自分のもてる力をすべて奉仕するようにとしくまれたものか、埋葬された王に力を附与するためであろうか。目、鼻、耳をつぶされたこの夷族を表現したと思える人物も、この切り離された頭骨と同じような役割を期待されたものかとも思う。神人面紋方鼎の神人の表現しているものが何かはさらに考える必要があるようだ。

§３　夔神鼓と四瓣花目紋〔第５図・第６図と表〕

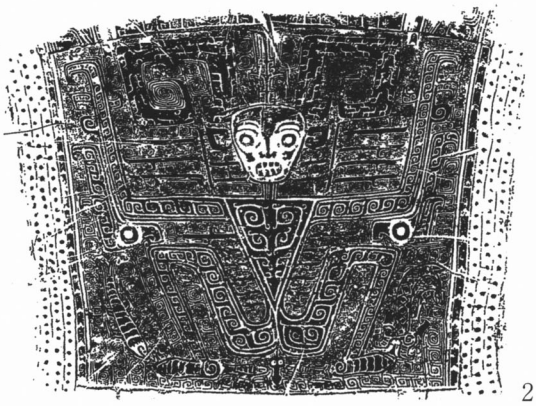
『山海経』第十四、大荒東経に「東海中に流波山あり、海に入ること七千里。その上に獣あり、状、牛のごとく、蒼身にして無角、一足、水を出入すれば則ち必ず風雨たり。その光、日月の如く、その声、雷の如し。その名を夔（き）という。黄帝之を得て、その皮を以て鼓を為り霊獣の骨をもって橛けば、声五百里に聞え以て天下を威す」とある。

京都大学人文科学研究所で金文研究会に参加していた時、貝塚茂樹先生より『神々の誕生』という新書版をいただいた。その折、地理学者であった御尊父小川琢治氏の話をされながら、『山海経』の研究が夔の解釈に大変役立ったことを語っておられた。泉屋博古館の青銅器館のまっ先に置かれている夔神鼓の名称は、一本足で音楽の名人、夔に由来する。天帝の身代わりに地上に降ってきた神＝夔（とう）は河神や岳神と柴祭りされていることが卜辞中多い。商人の高祖神として祭られている。音が夔（き）と夔（とう）は通じいつか両者は同一視されるに至ったと貝塚氏はいわれる。

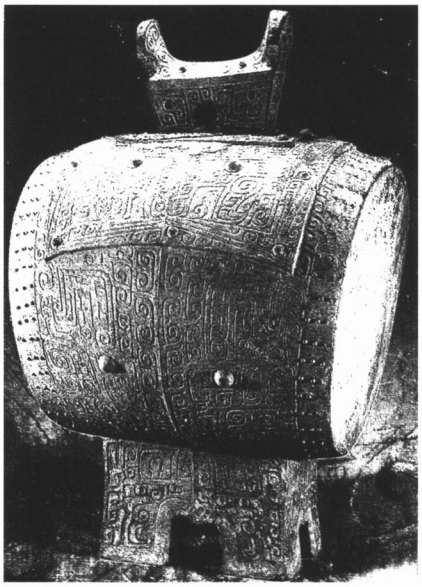
この夔神鼓に類似のものが他に２件ある。①は河南省安陽殷墟侯家荘M1217号大墓（文丁）出土の木製漆塗鼓で胴部に宝貝を用いて向かいあう饕餮紋を表現している。②は湖北省崇陽県王家嘴出土鼓〔第５図－３〕である。この鼓は河岸で発見された。水で流されてきたものというよりは、戦争中に捨てられたものと思えると報告者はいう。関連する遺構・遺物は周辺にみあたらない。



1



2



3

第５図　夔神鼓

1･2 泉屋博古館 Ａ面とＢ面　3 湖北崇陽王家嘴

泉屋例のような鬼神の像はなく、そこに几字形饕餮紋が大きく鋳出され、その上方には長方形の囲みの中に饕餮と同じ形の目をもった夔紋が鋳出されている。そして全面を雲紋風の紋様でおおう。李学勤氏は華中・華南産大鐃の紋様と共通することを重視してこの鼓の湖南産を主張されている。

『山海経』にでてくる夔をあてはめることでそれ以上の解釈がでてこず、長い間きまりのように扱われていたこの鬼神について、近年曽布川寛氏は新しい解釈を呈示された。氏は泉屋の夔神鼓側面の神人のペニスをつつく魚の存在、蹲踞して何かを支えているような姿勢などから、魚は水中を象徴し、神人は西漢長沙馬王堆Ｍ１号墓出土の非衣（幡）に描かれた大地を支える神獣と対比させて、この夔神も大地を支えており、銅鼓頂部を含めて上半分の方形区画内に表現されている饕餮紋は大地の神＝物であって、四川三星堆の２号坑より出土し、復元されつつある祭壇にも通じるという。西漢代の帛画に認められる天上界、地上界、地下（水中を含む）界の三世界があるという世界認識は、実は三星堆の祭壇や泉屋の銅鼓に代表されるように、殷墟期にはすでに存在していたのだとする論考を発表し

ている。

その当否については次章で述べるとして、自分はどう考えるのかと泉屋から出版されている『音楽』という写真の小冊子をながめていた。すると夔神の図像の上の几字形饕餮紋を含む鼓頂部をとり囲む図〔第６図－１〕に目がむき、それをスケッチした。基本的に長方形枠の連なりからなり、空白の一枠をはさんで𠙵のような紋様が鋳出されている。空白の部分には林巳奈夫氏は囧紋（中国の研究者は圓渦紋、三星堆の報告書では烱紋。）と呼ぶ巴紋が配される。代表的な例は、湖南岳陽魴魚山の山腰から出土したという銅截頭尊の胴部最上段の図像〔第６図－２ｂ・ｃ〕であろう。湖南省博物館の研究者には、米字形紋と呼ぶ人もいる。この紋様は四瓣花（目）紋、四葉花紋と呼ぶ人もいるものの骨組みだけを図像化したものである。そこで両者の紋様をもつものが、どんな関係にあるのか調べた。①基本的に圓渦紋に挟まれて四瓣花（目）紋をもつ銅器、これをＡグループとし、②圓渦紋に挟まれた米字形図像をもつ銅器、これをBグループとした。

Ａグループ　四瓣花目紋は安陽侯家荘M1001号大墓が初見である。林によれば鄭州期に同じような横長の紋様が土器に見られるとのことであるが、M1001号の骨製柶に描かれているものと変わらない。M1001号大墓は殷代後期の中興の祖、武丁の墓に比定されているが、鄭振香先生は武丁の時期よりも少し古い、殷墟期一期晩段の頃の墓葬と考えておられるようだ。ここでは一応武丁の墓との見解をとり入れておく。

ほぼ時期を同じくして殷墟婦好墓の銅觶の蓋と身の腹部に四瓣を大胆に変形し、目紋を強調したものが登場する。類例は今までのところ知らない。婦好は武丁の正妃三人のうちの一人といわれ、卜辞に明らかなように戦争にしばしば参加し、主に西北や北の夷族と闘った。軍の統帥権の象徴といわれる銅鉞を４件（２件は婦好の銘、２件は亞子啟の銘）もち、戦場でも兵士の進退を指示する鐃は５件一セットをもっていた。(一、二番目の大きさの鐃には亞弜の銘がある)。

同時期の殷墟郭家荘東南Ｍ５号墓は鼎名から旃族の族長または高級貴族の墓葬と考えられ、鉞１件、戈３件を含む兵器20件を副葬している。なかでも注目したいのは、戈の１件の銎後方の内に四瓣花紋が鋳出されていることである。報告者によれば旃は武丁時期の甲骨文に見え、武丁の出兵戦役にぴったりくっついて戦った武官で、武丁の信任を得て戦役中重要な役割を果たした人物と思えるという。

三期の殷墟郭家荘M160号墓は軍隊の統帥権を示すという鉞３件のうち２件の鉞の関近くの身に３件の四瓣花目紋を鋳出している。先の戈の内といい、この鉞の関に近いところに鋳出されている四瓣花目紋自体がこの紋様の戦役と関係深いことを暗示しているように私には思われる。銘に亜胡址とある。胡は族名。亞はいろいろな見解があるが、報告者は武官の職名、兵器230件のうち78％に銘がある。伴出した銅鐃３件は「中」銘で亞胡と址族、亞址と中族の関連が伺える。

なお侯家荘M1001号大墓から出土した銅戈の内には𠙵の紋様がある。河南省安陽殷墟劉家荘北地M61号墓出土の戈の内後方にも圓渦紋がある。圓渦紋・四瓣花目紋ともども族徽の可能性ももっ

ていることに注意しておきたい。

四期では殷墟西区の九三九座の単身葬のうちの１基。第七区のM93号墓の大銅尊２件の腹部いっぱいに鋳出された大四瓣花目紋が相当する。M93号墓は墓道をもつ甲字形大墓五座のうちの１基でM43、M150、M151の三座の車馬坑（殉葬坑）もこの墓葬に関係する。盗掘されている。

Aグループ

出土地または所蔵者	器の種類	時期	銘	備考
河南安陽侯家荘M1001号大墓	柶	殷墟一期		花びら横長 鄭州期と同じ
殷墟婦好墓	觶	殷墟二期		
殷墟郭家荘東南Ｍ５	戈	〃		『考古』2008－8
殷墟郭家荘M160	鉞	殷墟三期	亞胡址	
殷墟西区第七区M93	大銅尊	殷墟四期		２件 学報1979－１
河南羅山天湖M41	鼎	〃	文丁	息族
河南小屯82Ｍ１	鼎	〃		
河南鹿邑太清宮長子口墓	附耳帯蓋圓鼎	西周早期	長子口	
河南鄭州洼劉村99Ｍ１		西周早期		
河南洛陽老城北大街	尊	西周早期		『文物』2010－８
陝西宝鶏紙坊頭Ｍ１	四耳簋	西周早期		底外壁に陽紋
竹園溝M13（強伯）	盤	〃		強伯一族
〃　Ｍ７（伯格）	鼎			
〃　Ｍ４（強季）	鼎			
〃　Ｍ８	鼎・簋			
〃　Ｍ９	鼎			
〃　Ｍ３	簋			
陝西高家堡戈国墓Ｍ４	盤	西周早期		
山西霊石旌介丙国墓Ｍ２	觚	殷末	丙	４件
山西戸県侯家廟	斝	二里崗期		Bagley
湖北随州葉家山Ｍ１	觚			『文物』2011－11
湖南望城高砂脊ＡM53	大鼎			『考古』2001－４
ＡＭ１	小鼎			
湖南新寧				
江西余干黄金埠	甗			

大尊には圏足内に銘があり、亞字形で囲まれた中に「亞。覃日乙、受日辛、[illegible]日甲」とある。銘文中の[illegible]・受・覃いずれも族名と思われ、殷墟西区でも他の墓域にも共族の族徽をもつ青銅器の出土が知られ、殷末の雄族の一つであったことが知られる。

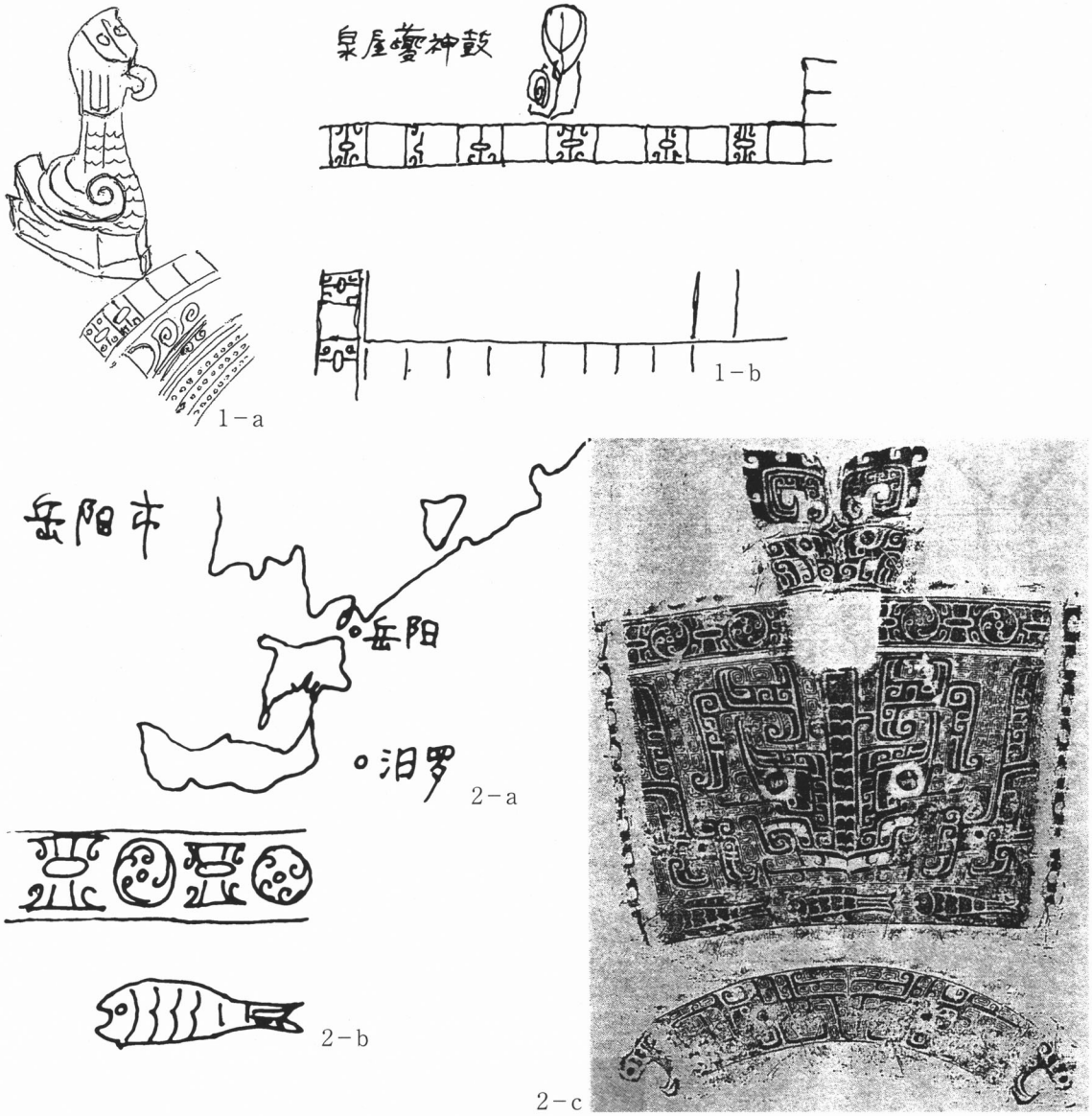
殷墟期の武丁の時代に南方開拓に協力したのが河南羅山天湖で殷～西周初にかけての墓葬群の発掘された息族の状況である。M1は息族尹の墓。兵権を象徴する銅鉞２件。商武丁の荊楚との戦いに、両者の関係が卜辞に見られるように早期の人は関係があった。M41号墓出土の鼎はAグループに属する紋様をもち鼎腹内側には「文丁」の銘をもつ。殷墟文化期四期の典型とのことである。武丁との協同作戦の頃はこの一族の盛期だったことが副葬品より伺えるが帝辛末あるいはもう少し後の時期のM41になると銅器は小さく器壁はきわめて薄く報告者は明器であるとし、出土した40件の銅器のうち26件が息の銘をもつことより息族と判断したが、その衰えと殷勢力の衰退を裏づけている。なおその時でも明器の鼎にAグループの紋様をつけているのは息族の心意気を示すものだろう。

西周初期の例としては河南鹿邑太清宮長子口墓が代表としてあげられよう。中字形墓道をもち亜字形の槨室を設ける西周代にはあまり目にすることのない殷系の大墓である。出土青銅器の多くが長子口の銘をもつ。そのうちの長子口銘帯蓋方鼎１件だけに四瓣花目紋が飾られている。長子口については張長寿氏が『呂氏春秋』季冬記第十二誠廉の中に「保召公就微子開於共頭之下、而與之盟曰、世為長侯守殷常祀、相奉桑林宜私孟諸、為三書同辞血之以牲、埋一於共頭之下、皆以一帰…」（(太）保召公、微子開ヲ共頭ノ下ニ（共頭は山の名）就カシメ、之（これ）ト盟イテ曰ク、世ヨ長侯トシテ殷ノ常祀ヲ守リ桑林ヲ奉ゼシメ宜（よろ）シク孟諸ヲ私セシム。三書同辞ヲ為（つく）リ之ヲ血ヌルニ牲ヲ以ッテス。一ヲ共頭ノ下ニ埋メ、皆、一ヲ以ッテ帰ル。）とあるのを見つけられ、殷の紂王（帝辛）の兄にあたる微子啓（開）に比定された見解に従っておく。

殷墟期から西周早期の間、四瓣花目紋を飾る青銅器は基本的には副葬品中１点しかない。また墓葬群の中ではそのうちのトップと思える人物の墓以外からは出土が知られていない。おそらく夷族との戦いの時、指揮官である銅器の所有者とともに役立ったものであろう。林巳奈夫氏の殷周青銅器紋様の研究の段階では出土品は所蔵者のコレクションが多くを占め、その紋様をもつ銅器がどんな遺構からどんな状態で出土したかは十分明かではなかった。出土物の考古学的基本データが各地の発掘で明らかになり始めた今は、紋様のもつ意味を林氏や馬承源氏の研究とは別に、考古学的事実から考えてみる必要があり、またそういうことが出来る時がきたと考えてよいのではなかろうか。なお宝鶏の強伯一族の竹園溝Ｍ７、Ｍ４、Ｍ９号墓などから四瓣花目紋をもつ鼎が１件づつ出土しているが殷あるいは周との同盟関係を考慮して何らかの戦役の時に協力することのあったことを推定させる。あるいは新干など長江中・下流域の方国との交流を示しているものであろうか。

Bグループ

出土地または所蔵者	器の種類	時期	銘	備考
河南安陽M18号墓	桂足圓鼎	殷墟二期	子漁	尊と斝に銘 考古学報1981－4
安陽博物館	鼎・斝	殷墟二期		出土地不明
上海博物館	尊			
湖北崇陽汪家嘴	銅鼓	商代後期		『江漢考古』99－1と98－3
湖北随州三里崗刘店毛家冲	鎛	西周		『随州出土文物精粋』
湖南岳陽魴魚山	截頭尊	商末		
湖南望城高砂脊	大鼎・小鼎	商末～西周早～中		AM1:2、AM1:3 『考古』2001－4
江西新干大墓	渦紋柱足鼎			
四川三星堆	圓罍			2号坑
泉屋博古館	夔神鼓	商末		
泉屋博古館	鎛	西周		



第6図　四瓣花目紋（Bグループ）

1 泉屋博古館 夔神鼓　2 湖南岳陽截頭尊

Ｂグループの多くは殷との接触のうちに、そのモティーフを自分達なりに翻案してとりこんだもので、その変化の過程の一端が湖南望城県高砂脊のＭ５号墓とＭ１号墓のそれぞれの大鼎と小鼎で認められる。四瓣花目紋が瓣が丸味をおびず方形に近くなる。そして次の段階では花瓣を構成する部分は骨組みだけになり、次の段階でＢグループの紋様になる。注意すべきはこの時中央に目紋があるかということ、渦紋の頭の向き、数である。ここではA、Ｂ両グループがあることを指摘しておいてくわしくは別の時をもちたい。

以上無作為に四瓣花目紋と圓渦紋の紋様帯や、四瓣花（目）紋単独の紋様をもつ青銅器を選びだしたところ、それを持っていた人物は、殷墟期に殷王朝内の重要人物であるとか、各氏族の族長クラスの人物でその墓から出土していることがわかった。しかも彼等は軍の統帥権の象徴といわれる鉞を必ずといっていいほど副葬していて、軍事にかかわっている人物が中心をなしている。またこの紋様帯をもつ青銅器をいずれも基本的には１点しかもたない。A、Ｂ両グループにわかれ、これらの紋様の採用が武丁の妃、婦好の代からはじまり、Bグループが武丁と婦好の息子ではないかともいわれている子漁からはじまるのと関連があると思われる。少なくとも殷王朝の勢力範囲内の方国にも、例えば山西霊石旌介で発見された丙国の墓葬の副葬品の中に、あるいは陝西高家堡の戈国の副葬品の中にAグループの紋様帯をもつ青銅器が発見されている。婦好は西北や北の夷族と戦い、武丁と子漁は南へ向かい、その時武丁とAグループ、子漁とBグループとの連合あるいは同盟のようなものが存在していたのではなかろうか。更にいえば四瓣花目紋は師団、例えば西周代でいえば西六師とか殷八師のような所属を示すか、あるいは軍神を表現しているのではなかろうかと考える。

湖北・湖南へ殷王朝は早くから目をむけ、二里崗期には夷族の奥深く、黄坡に盤龍城を築いて華中・華南から銅鉱資源を獲得する根拠地としていた。鄭州からほぼまっすぐ南に位置する。首都を安陽に遷した殷墟期にはさらに銅鉱の重要性は増し、武丁は息族と組んでこれまでの権益を擁護しようとし、一方子漁のBグループは、湖北随州に本居をかまえる曽国と好みを通じた。山西霊石旌介の「丙国」Ｍ２号墓に副葬された銅觚の蕉様夔紋の下の四瓣花目紋と同じようなモティーフの銅觚が曽国の当初あった随州市葉家山墓群（Ｍ１号墓）からみられることは象徴的である。「丙国」は代々世襲的な殷王朝の辺境防備軍として存在していて、曽国にもそうした役割を期待していた可能性は高い。一方、当初は曽国より強大であったが並存していて随州羊子山安居に墓葬群の存在の知られた噩（鄂）国には、次章で述べるようにまったく別個（独自）の青銅器群が存在していた。西周の昭王以降、殷を滅した西周王朝の殷と同じ南下政策に反抗した噩国は最終的には滅亡し、その跡に移った曽国だけが西周後半期には栄えた。中原の勢力とのつきあい方の相異が異なる結果を絵にかいたようにもたらせた。

A・Bグループともその主をなす四瓣花目紋と圓渦紋の紋様について私は以上のように考える。特に殷墟期にはこれらのモティーフをもっていることは殷の西北辺や北辺の防衛、華中・華南への侵出、いずれかの軍事行動と関連するものである。夔神鼓の胴部に表現された夔神は洞庭湖・鄱陽湖をはじめ長江、漢水、淮水といった大河の流域に育った人々の中で育まれた彼等の崇拝する鬼神の姿であり、本来A・Bいずれかのモティーフの鋳出された帯状紋で表現される殷王の軍団で守られている筈の方形区画内の饕餮紋に表現された殷の帝は、帯状紋様のうち圓渦紋は表現されず、Bグループの模倣かと思える四瓣花目紋も不十分な表現で、殷の上帝である饕餮紋を守るすべがないことの表現であると私は考える。銅鼓を作ったのは恐らく湖北省随州市安居羊子山周辺の噩国の工房か、湖南省望城県高砂脊の工房であろうかと推定する。夔神が華中・華南の鬼神であると考えることは曽布川氏と同じだが、彼が天上・地上・地下の三世界の存在を意味するとし、昇仙思想との関係を云々することにはまったく賛成できない。華中・南の夷族と呼ばれた人々の中原の殷や（周）王朝の侵入と植民地化することへの戦いを主張する戦闘用のドラムであると私は考える。『周礼』地官・鼓人に「…雷鼓ヲ以ッテ神祀ヲ鼓シ、霊鼓ヲ以ッテ社祭ヲ鼓ス、路鼓ヲ以ッテ鬼享ヲ鼓シ、鼖鼓（おおつづみ）ヲ以ッテ軍事ヲ鼓ス、鼛鼓ヲ以ッテ役事ヲ鼓ス、晋鼓ヲ以ッテ金奏ヲ鼓ス。金錞ヲ以ッテ鼓ト和シ、金鐲ヲ以ッテ鼓ヲ節シ、金鐃ヲ以ッテ鼓ヲ止メ、金鐸ヲ以ッテ鼓ニ通ズ。凡ソ百物、神ヲ祭祀シ兵舞、帗舞ヲ鼓ス。」とあるうちの、軍鼓であると考える。

§４　噩国青銅器の発見〔第７図－３・４〕

『春秋左氏伝』僖公四年（B.C.656）の伝には、斉の桓公が楚の使者屈完に周の昭王は漢水で溺れて没したと伝えられているが、楚はそのことに関係していないかと問うたとある。『呂氏春秋』季夏紀第六音律には物語り風に周の昭王は荊楚を従えんとして漢水を渉ったが、漢水のほとりに住んでいた民は昭王を悪み、膠で船底を接着した船に乗せた。渉る途中で船は壊れ乗っていた昭王と蔡公は漢水に沈んだ。王の戦車の右者であった辛餘靡の手は長く強力であったので王を振け、反って蔡公を振（救）けた。周公はこのことで辛餘靡を西翟の侯に之め、長公たらしめたとある。銅器の銘からは昭王の南征は２度あった。『古本竹書紀年』に「周昭王、十六年、伐二チ楚荊一ヲ、渉レル漢ヲ、遇二ウ大兕一ニ」とありまた「周昭王、十九年、天大ィニ曀ク、雉兔皆震ウ、喪六師ヲ干漢ニ」「周昭王末年夜有二五色光一貫二ク紫微一ヲ。其年王南巡シテ不レ反」とある。いずれにしろ昭王が漢水を渉り力をもってきた荊楚を伐ち、漢水一帯の穀倉地帯を周の支配下に置こうとしたことは伺える。荊楚の周辺に位置し、周と楚の勢力の間で板ばさみとなった随州などに住む夷族は周の圧力が強くなるにつれて文化内容にも強い影響を受けたと思える。

随州で知られていた青銅器文化は曽国のものが中心であった。戦国早期の曽侯乙墓の副葬品に代表されるように、独特の美と製作手法をもった青銅器が多数発見されている。そんな時、突然

目の前に現れたのは神人面紋銅卣、尊、方罍、簋で代表される噩国の青銅器文化である。

2004年７月25日関空からMU(中国東方航空) 060で北京へ出発。７月28日～31日まで安陽で行われた殷商文化学会で「死者の顔を覆面する風習について」と題して社会科学院歴史研究所の王震中博士の通訳で発表する。(『中国文物報』総1249期、2004年９月10日) 帰途北京で４泊し保利芸術博物館を訪ねた。そこではじめて目・鼻の顔形は人、口は饕餮紋の口が提梁有蓋卣の蓋と卣の器身の胴腹部に表現されている奇妙な青銅器をはじめてみた。蓋を二つに分けた部分と胴腹部前後の両面に人面と獣面紋の組みあわさった物が表現されている。器と蓋に「乍氒寶障彝」とある。出土地について俞瑋超氏は陝西扶風出土というとしておられた。

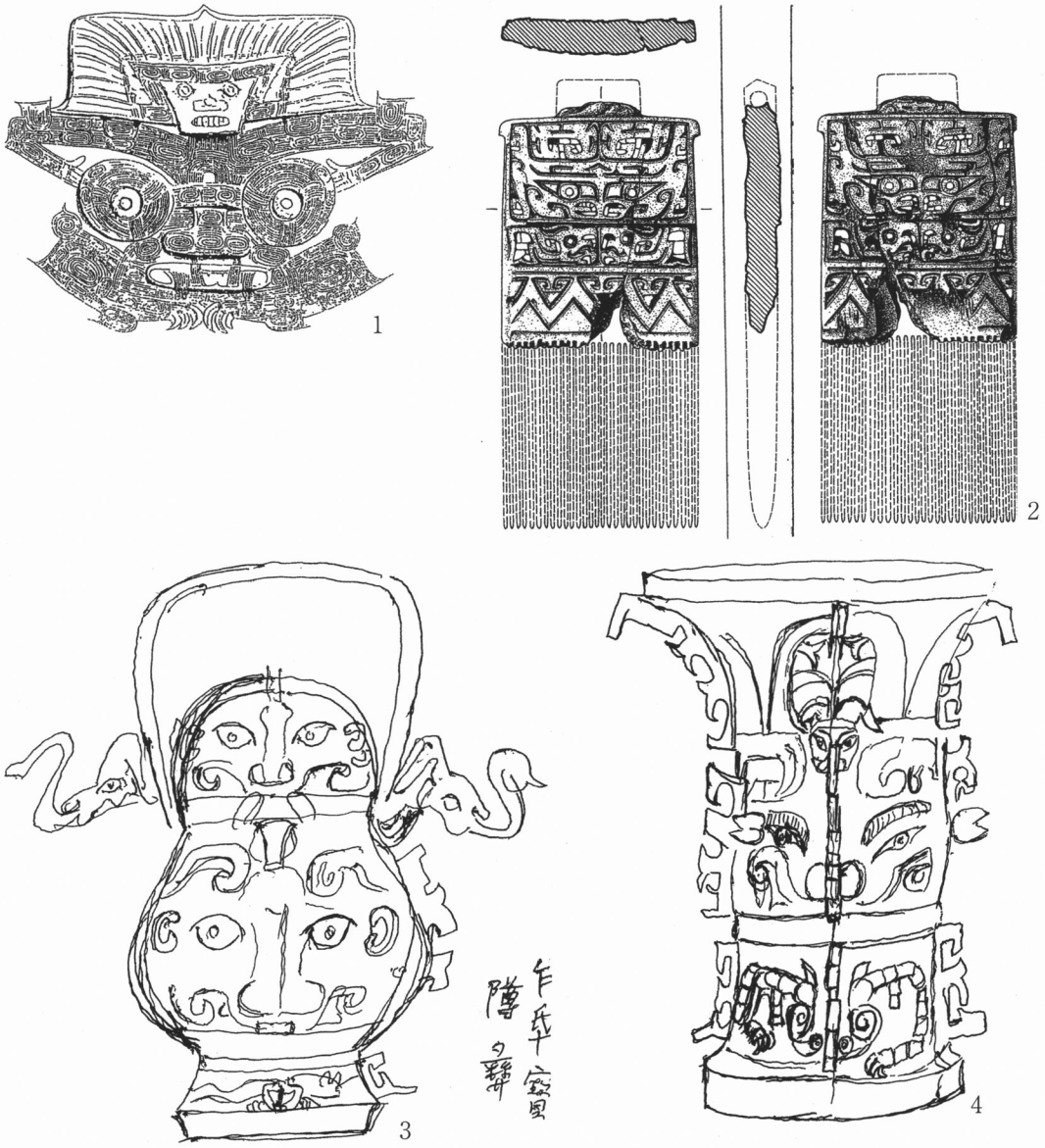
３人の著名な研究者がコメントしていた。馬承源氏は器の年代は昭穆の頃という。李学勤氏はそれより一代早い康昭の頃のものと判断された。紋様について馬氏は以前にみたことのあるネルソン・アトキンス博物館の双耳簋とアメリカ某氏蔵の巨大な簋にも同じような紋様のものがあったと。興味深いのは俞偉超氏の論で、甲骨文・金文・文献を洗って商周時期の信仰を検討すると対象は天地、山川河沢、先祖で、細分すれば天帝、后土、山神、水神、祖神となる。このなかで泉屋の虎食人卣とか夔神鼓は祖神、山神・水神はいわゆる魑魅魍魎の類、后土は地母神でその考古学的な品物としては俞氏は浙江余坑反山12号墓出土の双乳突起の九屈神人がそれだといわれる。天帝は獣面紋だという証拠に欠ける。今回の卣に表出された神面紋こそ天帝の図像とするにふさわしいのではないかと結論された。刺激的だが問題もありそうと思った。

人面とも獣面ともつかぬという奇妙なものだった。関心はあったがそれ以上進めないでいた。

そして2011年、11期の文物が届いた。最後のところにこの卣と非常によく似た卣がのっていた。その中の神面紋尊は天理参考館の獣面紋尊とよく似ている。報告者によると湖北省随州市安居羊子山Ｍ４号墓から出土した青銅器は20件、爵３件、「子」觶１件、高領斝１件、尊２件うち扉棱尊と名づけられている方のが神面紋〔人面鬼神紋、神人獣面紋、人間形鬼神、鬼神面などと呼ばれている。〕のモティーフで作られている。扉棱提梁卣１件〔蓋と身の腹部に鬼神面を飾る。〕蓋内の銘文「乍寶彝」、噩侯提梁卣１件、蓋内に２行にわたって銘「噩侯乍　旅彝」とある。さらに噩侯方彝（方罍）１件、盖の四面と身の腹部四面に神面紋。蓋内に１行７字の銘「噩侯乍氒寶尊彝」、噩侯銘罍１件。盖内に銘二行「噩侯乍旅彝」。噩侯盤１件。盤の内底に銘二行「噩侯乍旅彝」。双人紋盉１件、獣面紋甗１件、獣面扉棱方鼎１件、獣面紋鼎１件、噩中方盖鼎１件、蓋内銘２行６字「噩中乍寶障彝」。双耳方座簋１件。四耳方座簋１件。直棱紋簋１件の以上20件が報告されている。そのうち尊と提梁卣と方罍の各１件に神面紋と呼んでいる人と饕餮のくっついたような紋様がみられ、保利芸術博物館の卣のモティーフと共通している。

神人獣形紋は卣のほかに尊と方罍が各１件ずつあった。報告者によると同じモティーフの方座簋（両耳）はアメリカのネルソン・アトキンス博物館にあるとのことである。尊は神面ではなく饕餮紋のものが天理参考館にあり、銘〔乍氒寶障彝〕も含めて両者の関係深いことが興味深い。

三段にわかれた尊側面の紋様は２つの点で私の興味をひいた。①は尊の肩部に位置する儀首の構成が大きな耳をもった象として表現されて奇妙なことに鋳型の合わせ目の甲ばり部を中国の研究者のいう扉棱にした部分がまるで先に触れた四川三星堆の尊のモデルになった安徽阜南出土の虎尊の側面にみられる人形鬼神――口から長い舌をだしているように見える――について見たのと同じように見えること。②は神面尊の三段に別けて論じてきたが、円い巻足の上方、三段の最下段に表現された二頭双身の夔龍の脚足の形・感じは長江下流の新石器時代文化の中でも栄えた良渚文化の獣足と非常によく似ている。とくに〔第７図－１〕に示したように良渚文化の中でも浙江省余抗県反山Ｍ２号墳より出土した琮玉の王とよばれている玉琮に彫られた神人獣面紋にみうける獣の脚足と非常によく似ており、良渚の文化が沿海地帯に広がった新石器時代文化の中でも



第７図　天神と地神の合体

1 良渚文化　反山M12玉琮　2 殷墟侯家荘M1217　象牙梳　3･4 噩国神人獣面紋卣･尊

影響力が特に強かったことを示している。

天神と地神の合体

では新しく出現した神獣面紋銅器群からどんなことが考えられるだろうか。先に夔神鼓のところで曽布川氏の考えを紹介したが、それと関連して考えてみたい。確かに三世界存在の願望は底流として存在したかもしれないが、儒教思想のもとでは十分にあることができなかった。曽布川氏は天上、地上、地下の存在から巨樹の存在も含めて殷から西漢まで三世界存在という世界観が存在していたと主張された。ひとつの原理を把握するとすべてそれで解釈したいという気持ちがおこるのは無理もないと思うけれども、氏の主張される図像学を用いてということなら図像のまだ発見されていない時代についてまで前後のデータの解釈をおし及ぼすことには少し慎重であるべしと私は考える。新石器時代の良渚の神人獣面紋の存在は、天神と地神の合体で、これは曽布川氏が三星堆の祭壇その他から、白目のある目とない目のちがいを明確にされたのがおおいに役立っている。そのあり様は羊子山の神人獣面紋卣、尊その他のモティーフと同じ天地の合一（合体）を表すものである。

三星堆にすでに三世界観があったとし、天に通ずる梯子も建木とか若木とか扶桑とか呼び方はさまざまでも天に達するための道具は用意されていた。華中・華南の世界ではその世界観を殷～西漢まで持ちつづけていたのだという意見に対して、画像石にくわしい信立祥氏は例えば戦国時代や漢代、崑崙山にいるとされる西王母は仏のようなやさしいおもかげのもち主ではなく、虎豹のうそぶくもののようであったと『山海経・西山経』などに書かれている。人や人の霊魂がうかつに近づくと、とんでもない危険なことであった。漢代人は誰も崑崙山にのぼって西王母に会いたいなどとばかなことは思わなかったと信立祥氏は曽布川説を批判している。

筆者は思うに太古の昔、絶たれた天地の間は新石器時代の良渚文化に端的に知られるように天神と地神の合体、合一を願うものであった。良渚のものと同じモティーフが湖北省随州市安居羊子山M４号墓出土の神人獣面紋尊に代表される図像に見られる。さらに天神と地神の合体は殷墟期四期（帝乙）に比定された殷墟西北崗侯家荘M1443号大墓出土の象牙梳〔第７図－２〕のもち手に彫られた図像とも共通するモティーフである。紋様を欠くが同じ侯家荘M1003号大墓からも同じタイプの象牙製梳が出土している。

これらの図像から伺えるのは、三世界観ではなく大地の合体、合一を願う心の表現が、中国の江南を中心として長江流域では新石器時代から少なくとも殷末周初の頃までは、主流を占めていた。それは上帝として絶対神を仰ぐ中原の殷周文化では、またその後裔をもって任じて支配者の権力の前にひたすら服従することを教える後代の思考、例えば儒教思想に代表される―の中では、天と地の合体＝神と民との雑り＝権力者のいない平等な世界を夢みる人々の存在を許すことは厳

しく禁じられるべきことであったと思える。しかし彼等はあきらめず、太古の昔に絶たれた神と民の雑りあう世界の存在を信じ、その修復されることを待ちつづけた結果が、一歩進んで思いえがいた世界が曽布川氏の主張される三大世界の存在として間歇泉のように西漢代の一時、楚地方を中心にあらわれたものと思える。虎卣の人物、神人面紋方鼎の神人、夔神鼓の夔神、噩侯乍の神人獣面紋尊ほかの神人の存在は、神と民のまじりあう時代のいつかくることの長江一帯の人々の希求が産んだ図像であったといえると筆者は考える。しかし中央の権力は周辺世界の自由をそのまま見のがす筈がなかった。その圧迫に対して噩侯鼎に見えるように噩侯馭(ギョ)方も一度は南征から帰ってきた周王と友好関係を保とうとした。(白川『金文通釈』一四二) しかし結局、周の要求に耐えかねて噩侯馭方は南淮夷・東夷の国々の人々をひきいて大反乱をおこした。周の厲王の時代に比定されている禹鼎の銘によれば、当初、西六師、殷八師がたちむかったが敗れた。武公の家臣、禹は周厲王の命を武公よりうけ、武公所有の軍とともに、西六師・殷八師もひきいて馭方と戦い、ついに捕えて身柄をひきわたした。多友鼎に見るように宗廟での勝利を祝う儀式の際に折首(首をおとす)されたものと思う。その戦にでむく時、武公を通じてもたらされた厲王の命令は「寿幼といえども遺すことなかれ」といったとある。結果は、反せる虎方や反せる噩侯国の滅亡であった。高文化の世界は自己の欲求を充たすために、これから発展しようとする世界の資源を自己のものにしようとする。禹鼎の銘にある周の厲王と思える王が禹に対して「寿幼といえどもみのがすな」といった意味の言葉を吐く。権力の本質の時代と無関係のあり様をまざまざと見る思いがする。

(2015.1.17初稿了)

(2015.2.25再稿了)

附記　なお図面のスケッチは筆者によるものです。

参照文献

注はつけずに参照ということで文献をあげさせていただきました。体力と時間の問題です。

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1001号大墓』上冊・下冊　1962

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1002号大墓』　1965

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1003号大墓』　1967

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1217号大墓』　1968

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1004号大墓』　1970

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1500号大墓』　1974

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1550号大墓』　1976

中央研究院歴史語言研究所編・出版『侯家荘1129・1400・1443号大墓』　1996

中国社会科学院考古研究所『殷周金文集成釈文』第二巻香港中文大学中国文化研究所　2001

白川静『白鶴美術館誌』第五三輯「金文通釈」五三、白鶴美術館　1981

厳志斌『商代青銅器銘文研究』上海古籍出版社　2013

中国社会科学院考古研究所『殷墟婦好墓』文物出版社　1980

中国科学院考古研究所『澧西発掘報告』文物出版社　1962

中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告』1958-1961　文物出版社　1987

中国社会科学院考古研究所『殷墟的発現与研究』　科学出版社　1994

中国社会科学院考古研究所『安陽殷墟郭家庄商代墓葬』中国大百科全書出版社　1998

中国社会科学院考古研究所『張家坡西周墓址』中国大百科全書出版社　1999

中国社会科学院甲骨学殷商史研究中心『胡厚宣先生紀年文集』科学出版社　1999

中国社会科学院考古研究所『安陽殷墟花園庄東地商代墓葬』科学出版社　2007

河南省文物考古研究所ほか『鹿邑太清宮長子口墓』中州古籍出版社　2000

陝西省考古研究所『高家堡戈国墓』三秦出版社　1991

随州市博物館編『随州出土文物精粋』文物出版社　2009

山西省考古研究所『霊石旌介商墓』科学出版社　2006

成都市文物考古研究・北京大学考古文博院『金沙陶珍』文物出版社　2002

江西省文物考古研究所・江西省博物館・新干県博物館『新干商代大墓』文物出版社　1997

湖南省博物館『湖南出土殷商西周青銅器』岳麓書社　2007

『青銅篇：圓明園重現台湾』中華経緯芸術　2002

天理大学附属参考館『殷周の青銅器』　1995

朝日新聞社『三星堆』朝日新聞社　1998

広川　守ほか『高精細画像を利用した中国殷周青銅器文様の研究』泉屋博古館　2013

広川　守ほか『青銅器の内部を探る』－X線ＣＴスキャナによる中国古代青銅器の構造技術解

析－　泉屋博古館　2014
泉屋博古館『楽器』
上海博物館『中国古代青銅館』
陳夢家『殷墟卜辞綜述』科学出版社　1956　影印版（大安）　1964
張光直『中国青銅時代』中文大学出版社香港　1982
施勁松『長江流域青銅器研究』文物出版社　2003
孟憲武『安陽殷墟考古研究』中州古籍出版社　2003
彭裕商『西周青銅器年代綜合研究』巴蜀書店　2003
林巳奈夫『殷周時代青銅器紋様の研究』吉川弘文館　1986
林巳奈夫『中国古玉器総説』吉川弘文館　1999
曹定雲『殷墟婦好墓銘文研究』文津出版社　1993
李学勤・彭裕商『殷墟甲骨分期研究』上海古籍出版社　1996
丁山『商周史料考證』中華書局出版　1988
袁珂校譯『山海経校譯』上海古籍出版社　1985
朱启新『考古人手記』第一輯　三聯書店　2002
李学勤『青銅器与古代史』聯經　2005
楊寛『西周史』台湾商務印書館　1999
許倬雲『西周史』聯經　1984
馬承源『中国青銅器研究』上海古籍出版社　2002
鄭振香「論殷墟的発展過程」『石璋如院士百歳祝寿論文集』台北南天書局　2002
王震中「試論商代“虎食人卣”類銅器題材的含义」『商承祚教授百年誕辰紀年文集』文物出版社　2003
島邦男『殷墟卜辞研究』中国学研究会　1958
信立祥『中国漢代画像石の研究』同成社　1996
俞偉超「“神面卣”上的人格化“天帝”図像」『古史的考古学探索』文物出版社　2002
張長寿『商周考古論集』文物出版社　2007
杜預『春秋經傳集解』上海古籍出版社　1986
楊伯峻『春秋左伝注』新華書店　1981
大島利一・内藤戊申・伊藤道治・永田英正『春秋左氏伝』筑摩書房　1970
近藤喬一「中国古代に於ける鏡の副葬」山口大学『アジアの歴史と文化』第８輯　2004
近藤喬一「九鼎と金人」山口大学『アジアの歴史と文化』第10輯　2006
近藤喬一「鄭州商代銅器窖蔵考」山口大学『アジアの歴史と文化』第11輯　2007
甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化』金曜会　1998

コダーイ芸術教育研究所編『わらべうたであそぼう－乳児のあそび、うた、ごろあわせ』選書20、明治図書出版　1993　山口大学図書館の和田祐子さんのお世話になりました。

Marija Gimbutas,"The Goddeses and Gods of old Europe" -6500～3500B.C. Myths and Cult Images, University of California Press.　1982

Robert W. Bagley, "Shang Ritual Bronzes in the Arthur M. Sackler Collections"vol.I ancient chinese bronzes in the Arthur M. Sackler Collections

Vadime Elisseeff, "Bronzes Archaiques Chinois au Musée Cernuschi" vol.1-Tome1　1977

曽布川寛「三星堆祭祀坑銅神壇の図像学的考察」、『東洋史研究』第69巻第３号　2010

曽布川寛「三星堆祭祀坑銅獣面と良渚玉器神人獣面文」、『泉屋博古館紀要』第二十八巻　2012

『考古学報』1981－４　考古研究所安陽工作隊「安陽小屯村北的両座殷代墓」

『考古学報』1986－２　河南省信陽地区文管会・河南省羅山県文化館「羅山天湖商周墓地」

『考古学報』1987－１　中国社会科学院考古研究所安陽隊「殷墟259、260号墓発掘報告」

『考古学報』1979－１　中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1969－1977年殷墟墓葬発掘報告」

『考古学報』1991－３　安陽市文物工作隊「殷墟戚家庄東269号墓」

『考古学報』1992－１　中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「1986－1987安陽花園庄南地発掘報告」

『考古学報』2008－３　中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「殷墟大司空M303発掘報告」

『考古』2001－４　湖南省文物考古研究所ほか「湖南望城県高砂脊商周遺址的発掘」

『考古』2005－１　中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「河南安陽殷墟劉家庄北地殷墓与西周墓」

『考古』2008－８　安陽市文物考古研究所「河南安陽市殷墟郭家庄東南五号商代墓葬」

『考古』2009－５　（500期）安陽市文物考古研究所「河南安陽市榕樹湾一号商墓」

『考古』2009－10　袁挽玲「周代青銅礼器的生産与流動」

『考古』2012－７　湖北省文物考古研究所ほか「湖北随州市叶家山西周墓地」

『考古』2012－12　中国社会科学院考古研究所安陽工作隊「河南安陽市殷墟王裕口村南地2009年発掘簡報」

『考古』2012－12　劉家庄北地2010～2011年発掘簡報

『考古』2014－９　徐良高「中国三代時期的文化大伝統与小伝統」

『文物』1997－12　湖北黄岡市博物館・湖北蘄春県博物館「湖北蘄春達城新屋湾西周銅器窖蔵」李学勤「談盂方鼎及其他」方鼎を作った盂は文丁の子、帝乙の兄弟、青銅器は商末（商周の際）

『文物』2001－６　鄭州市文物考古研究所「鄭州市洼劉村西周早期墓葬（ZGW99M1）発掘簡報」

『文物』2003－４　河南省文物考古研究所「鄭州商城新発現的几座商墓」
『文物』2003－12　洛陽市文物工作隊「洛陽東車站西周墓発掘簡報」
『文物』2005－６　楊暁能「商周青銅器紋飾和図形文字的含義及功能」
『文物』2010－８　洛陽市文物工作隊「洛陽老城北大街西周墓」
『文物』2011－11　湖北省文物考古研究所「湖北随州叶家山西周墓地発掘簡報」
『文物』2011－11　張昌平「論随州羊子山新出噩国青銅器」
『文物』2013－２　石鼓山考古隊「陝西宝鶏石鼓山西周墓葬発掘簡報」Ｍ１、Ｍ２、Ｍ３西周早期とくにＭ３は商末周初の可能性大
『文物』2013－４　李学勤「石鼓山三号墓器銘選釋」
『文物』2013－４　辛怡華・王顥・劉林「石鼓山西周墓葬出土銅器初探」
監修堀一郎・宮地昭訳　Ｍ・エリアーデ著作集第６巻『悪魔と両性具有』せりか書房、1985
廬連成・胡智生『宝鶏強国墓地』上・下、文物出版社、1988
四川省文物考古研究所『三星堆祭祀坑』文物出版社、1999

山口大学『アジアの歴史と文化』第２輯から第19輯までの間に、私は11編の論文を掲載していただきました。今回、この20数年間の一部総括としてご覧いただければ幸いです。

〔附録〕

2003年3月1日　於山口大学大学会館

最終講義－中国の古鏡について

近　藤　喬　一

青銅器への関心　学生時代、一五代住友吉左衛門収集の殷周青銅器の展示の見張り番のアルバイトをしました。当時は住友別邸の蔵の中で一年に一度か二度一週間か二週間、一般に公開されるというやり方でした。あまり人気のない秋の冷え冷えとする京の蔵の中で、奇怪な文様を沢山身に纏った青銅器群を見るともなく眺めている間に、たぶん青銅器への関心は育ったのだと思います。その後助手になった頃から、京都大学人文科学研究所で、貝塚茂樹先生を中心とする金文研究会に参加させていただき、殷周青銅器への関心をますます強くしました。

考古と文献の間　喰わんがために平安博物館に就職することになりました。仕事は平安京の発掘調査と研究ということでした。ここでいる間に、中国の文献や考古に強い先生方とまた巡り会いました。福山敏男･薮田嘉一郎･木村捷三郎･田中重久･角田文衛といった人たちでした。考古と文献の間を縫って歴史を再構築しようという私の方法は、平安京の調査・研究やこれらの方たちとの接触のうちに、知らず知らず育まれたものだと思います。

鏡銘の研究の遅れ　王仲殊氏の三角縁神獣鏡に関する一連の研究が発表されたとき、日本の考古学者の鏡銘に対する研究の遅れを痛感しました。中国の大学の考古学部門では講義の中に金石文学の分野が必ず設けられており、必修となっております。日本の考古学の講座を開講している大学で、金石文の講義や演習を必修にしているところは恐らく殆ど無いのではないでしょうか。そのなかで、福山敏男氏だけが、三角縁神獣鏡の鏡銘の解読とその歴史的背景に肉薄した業績を挙げられていました。王仲殊氏の研究は、中国考古学界の半世紀に及ぶ発掘調査に基付いた成果で重いものでしたが、考古事実と歴史の真実は必ずしも一致しないこともあるのではないかと、私は考えています。

宝貝の研究　三角縁神獣鏡や西晋の鏡について自分の研究を発表してから、もっと中国古代を広い範囲で、時間幅も長く学びたいと感じ、早くから関心を持ちつづけていた宝貝をテーマに選びました。殷の祖先崇拝や周の礼の世界で、主役を演ずるのは殷周青銅器と呼ばれる、祭祀に用いられた青銅の容器や楽器です。中国文明の周縁世界から持ち込まれた宝貝は、殷周文化の中心地で支配と被支配の媒介役を、青銅器と同じように果たしていたのです。殷王や西周の王たちは、重要な軍事や祭祀の折りに大功を立てた貴族や氏族の長に恩賞を与えましたが、その恩賞の代表が宝貝でした。女性器

との類似からくる生命の再生の観念を本来持った宝貝は、それをもらったことを記念して青銅器を作り、その青銅器を用いて祖先神を祭ることを許される、自分たちの祖先神だけではなく、王朝の祖先神をも祭ることを許されるという仕掛けになっていたのだと思います。現代の日本人には何の変哲もない宝貝が、殷や西周の王朝にあっては住友の青銅器と同じように支配と服従の関係を支える非常に重要なものと見なされていました。

しかしこういったあり方も殷周的世界の崩壊とともに終わりを迎えます。九鼎に代表される礼的身分秩序世界の支配から、強大な皇帝権と官僚機構に代表される秦漢統一帝国の出現への変化とも言い換えられると思います。秦の昭王の時、周は滅び支配権のシンボルであった九鼎は秦に遷ります。そのうちの一つが飛んで、山東省を流れる泗水に沈んだという『史記・秦本紀』の記述は、この間の状況をよく比喩的に表現しているものといえましょう。

周縁世界から来た鏡　宝貝と同じように周縁から中国文明の中心に入ったものとして銅鏡が挙げられるでしょう。宝貝は南海の亜熱帯地域産のものが運ばれたのに対して、鏡は本来中国文化圏の西北に広がる遊牧民の世界の産物でした。シャーマンの呪的行為の手助けをしていた鏡は、たぶん太陽や月、ある時には星の役割を果たしたのではなかったかと思います。殷墟婦好墓から出土している鏡も、婦好が羌方や土方の遊牧系の人たちを征伐したときに手に入れたものではないでしょうか。

戦国の楚鏡　鏡を中国文化のものとしたのは戦国時代の楚の国でした。晋から恐らく学んだ鏡というものを、呪的な意味合いも残しながら発達した漆器工芸、絹織物業、銅原料の豊富さにうらづけられた工芸品あるいは美術品にまで高めたのです。絹織物の嚢に入れ、漆器の奩や竹籠に入れられた化粧道具としての鏡が登場したのです。楚の影響の強い前漢前期、鏡は殆ど楚の頃と変わりませんでした。漢的なものになるのは、武帝以後のことです。

温明の出現　武帝に寵愛された霍光は、武帝の死後昭帝・宣帝の二代に亘って二〇年間、漢帝国を実質支配しました。その死に当たっては、宣帝と皇太后の臨御があり黄腸題湊や金縷玉衣や温明などを特に下賜されたと『漢書』にはあります。江蘇省の揚州を中心にして棺の頭部から漆面罩と呼ばれているものが発見されています。箱形で顔と頭部を覆い顎の先に当たる部分には、庇がついている形です。顔の顔面と左右に相当する箱の内側、時に外側に小型の昭明鏡や日光鏡をはめ込んであります。これが温明と呼ばれたものだと中国歴史博物館の孫機氏は考えています。鏡の代わりに玉璧をはめ込んだ例もあります。顔面に当たるところに四葉座金具がつけられている場合もあります。辟邪の役割をはたしたものと思えます。前期古墳の竪穴式石室からは、頭部を囲むような形で三角縁神獣鏡が発見される例がしばしばあります。前漢の中期から後期にかけて、玉衣とは別に辟邪の用を果たしたものとして、温明があり弥生時代、三雲の甕棺の中から発見されたガラス璧は温明に用いられたものであった可能性は高いでしょう。古墳時代になって、頭部をあるいは時に足の先の方を囲む鏡群も、辟邪を意図した温明の役割を果たしたものと考えてはいけないでしょうか。棺内だから舶載鏡、棺外だから日本製といった考え方に私は抵抗感を覚えています。

曹操の盗掘と魏文帝の薄葬令　後漢の混乱の中をかい潜って抬頭した曹操は、軍事資金の足しにするために、故郷に近い前漢梁孝王一族の墓を徹底的に盗掘しました。岩山を掘り抜いた崖洞墓が18基ほど報告されていますが、財力豊かで天下に轟いた孝王と李皇后の墓を含め大部分の墓が盗掘されスッカラカンでした。豊かさの一例として、柿園漢墓の甬道内から発見された穴蔵から約225万枚の漢の半両銭、重さ何と5.5屯が発見されています。曹操の軍隊には発丘中郎将や摸金校尉が置かれていたと、曹操のこの盗掘行為を罵った陳琳の檄文が『文選』や『後漢書』に残っています。父親の行為をじっと見つめていた長男の曹丕は魏帝の位についた後有名な薄葬令を公にしました。三国時代曹魏の墓が極めてわずかしか発見されていないのは、曹操の行為が跡を引き、文帝の決断が預かって大きかったのでは無かろうかと思えます。

曹魏の時代以後重視された鉄鏡　華北へ遊牧民が定住するようになったのは、曹操の鮮卑対策などが大きく影響しました。鮮卑の軍団を彼は活用しました。金銀錯内行花文鏡や金銀錯夔鳳鏡などの愛好は後漢の前期の終わり頃から始まりますが、金の愛好そのものが遊牧系の人々との接触の結果ではないかと私は考えています。卑弥呼が魏の少帝芳から貰った銅鏡百枚は、もしかすれば銅鏡よりも鉄鏡を上位に置いていた魏や西晋・東晋の支配者にとっては、容易なことであったでしょう。

中心から周縁へ　宝貝は少なくとも前漢までは、中国中原で重視されました。しかしそれが倭国で形を変えて有り難がられるという事はありませんでした。一方、鏡は中国の権威を纏った、シンボルとして弥生・古墳時代の倭国で有り難がられたということは、周知の事実です。漢代中原では再生や不死の観念を色濃く纏っていたのは玉でした。ランクの低い扱いしか受けなかった倭国の国々の首長たちは、玉製品を滅多に手に入れることが出来なかったと思われます。玉璧などの代用品として鏡が取り扱われた可能性は高いと思われます。不死の観念が仏教思想の流入の結果、薬草を飲んだり食べたりしたり、修行によって得られるという考え方に変わった結果、三国時代以後、文帝の薄葬令の公布とも相まって玉製品の重視は中国ではぷっつりと無くなります。この状況は魏だけでなく、呉も同じです。もともと玉製品と縁の薄かった倭国の国々では、鏡の本来持つ呪的性格と玉の代理として漢代いらい鏡が身に纏っていた不老不死という役割も兼ねて愛好され、その上に中国皇帝の権威を重ねて支配・被支配の道具としたものでしょう。その鏡が三角縁神獣鏡であったかどうかは、なお検討を重ねる必要がありましょう。

（山口大学名誉教授）